



Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター ニューズレター March 2019



高校の「総合的な探究の時間」の あり方を考える

朋子 教育推進部教授 🚓



学習指導要領が改訂された。高校は 2019年度からの移行期間を経て、2022年 から本格導入されるこの指導要領の目玉 は、アクティブラーニングと同意語である 「主体的・対話的で深い学び」と、教学マ ネジメントと同意語の「カリキュラム・マネ ジメント」の導入である。この並びから明 らかなように、今回の学習指導要領は大学 改革のフレームワークと類似しており、主に 中等教育をターゲットとして高大の接続性 を高める狙いがある。

教育政策的な解説はさておいて、これを 受けて高校が大きく変わろうとしているの は明らかだ。その中での最近のトピックは 「総合的な探究の時間」のあり方である。 これまでの「総合的な時間」にとどまらず、 まさに自ら問いを立て、解を探究する中で 主体的・対話的でかつ深く学べよ、という のが学習指導要領の意図だ。

「総合的な探究の時間」の内容、または捉 え方には大きく分けて2つの方向性があ

る。エンゲストロームら (Engeström et al., 1995)の言葉で表現すれば、「垂直的学習」 と「水平的学習 |だ。何かが上手になったり 早くなったりする熟達は「垂直的学習」であ り、学校の教育カリキュラムで言えば教科教 育に当たるだろう。その対比として探究学 習は、今まで気にも留めなかったことに意味 を感じたり、自分自身のあり方が変わってい くプロセス(香川・青山, 2015)であるから、 タテではなく、ヨコに伸びる「水平的学習」 だ。知識を偏重する高校では、教科教育の 垂直的学習に軸足がある中、探究活動の水 平的学習に、ある意味、カリキュラムとして 越境することで、教科教育で学習した内容 を再構築することが見込まれる。

一部の高校では大学での研究活動の先 取りし、学会での発表や論文投稿なども盛 んにおこなわれているところもある。その 中でも体裁を整えるため、型にはまった研 究スタイルを教え込んでいるところも少なく ないように思う。それらを否定するわけで はないのだが、なんだかしっくりこない。こ れまで述べてきたように、カリキュラムにお いては垂直的学習と水平的学習の往還が 必要だ。その中で大学の研究活動は、まさ に垂直的学習を極めるものである。垂直的 学習を極めた先に広がる多峰性を否定する わけではないが、限られた「総合的な探究 の時間」では成し得ることが難しいはずだ。

研究は大学でできる。先取りすることに どのような意味があるのか、私にはまだ見 えてこない。それよりも高校生という15歳 から18歳の発達段階に適した水平的学習 として、学校内外のさまざまな年代の人々と 語り、刺激を得る中で自らを見つめるメタ 認知を高め、自分のキャリアや可能性を検 討していくような水平的活動の価値が必要 ではないだろうか。18歳人口が減る中、大 学では今後、多様な学習を経験したいろい ろな学生を受け入れていくことになる。そ れを見越して初年次教育の教育目標やデザ インを検討する時期なのかもしれない。

フォーラム・セミナー報告

関西大学・明治大学合同IRシンポジウム 「私立大学におけるIRの可能性」を実施しました

12月22日、梅田キャンパスにて「私立大学におけるIRの可能性」というテーマで、明治大学との共催でIRシンポジウムを開催しました。現在、高等教育を取り巻く環境は大きく変化し、私立大学はこれまでの経験値や感覚を大切にしながらも、エビデンスやデータを基盤とした改革への転換が求められています。そのような中、学内外のデータを調査・分析し、大学の意思決定や継続的な改善活動、教育の質的転換を支援するIR(Institutional Research)の役割はますます高まっています。

本シンポジウムでは、第一部として、明 治大学の山本幸一氏と本学の川瀬友太 から、各大学のIR活動に関する事例報告 がありました。第二部では、本学教育推 進部の森朋子教授をコーディネーターとして、山本氏と川瀬に加え、明治大学千田 亮吉副学長と本学芝井敬司学長が参加 してパネルディスカッションが行われました。これからの大学運営には、IR機能が 必要不可欠であり、それを発展させ活用 することが、教育の質の保証、人材育成、 大学のブランド力の向上にとって重要だ ろうと括られました。シンポジウムを通し て、教育研究改革の実質化、継続的改善



事例報告 明治大学 山本幸一氏

日程:2018年12月22日(土)14:00~17:00 場所:梅田キャンパス8階

> への機動力となるIRの役割について、会 場全体で活発な議論が行われました。

(教育推進部特別任命助教 矢田尚也)



事例報告 関西大学 川瀬友太



パネルディスカッション

日程:2018年12月7日(金)10:40~12:10 場所:千里山キャンパス第4学舎1号館 1階 協同学習室

12月7日(金)、千里山キャンパスにて 「BYOD環境で、授業がどう変わるのか?」をテーマに第17回日常的FD懇話会 を開催しました。総合情報学部の久保田 賢一教授による講演に加えて、久保田・

黒上研究室の大学院生らがワークショップを実施しました。ワークショップの企画・運営を中心的に行った総合情報学研究科修士課程1年の科瑶さんから企画・当日の様子を振り返ってもらいました。

企画内容については、久保田賢一先生の著書である『主体的・対話的で深い学びの環境とICT 一アクティブ・ラーニングによる資質・能力の育成一』(東信堂)を用いてBYOD環境について勉強し考えました。また、教員や職員のみなさんが私たち「学生の生の声」を知る機会にしてもらえたらと思い、学生と教員・職員間でディスカッションを行うことができるワークを用意しました。ワークショップから感じた事は、大学は

多くの方が協力して私たちの学びをサポートしてくださるだけあって、BYOD環境を整えるにあたって様々な種類の問題があるということでした。しかし、参加者からは「BYOD環境で自分が考える理想の授業に近づく」という実感を持ってくださった方も多く、いろいろな問題を解決した先にあるBYOD環境は、必ず大学教育に良い影響を与えると感じました。

(総合情報学研究科1年 科瑶)

(教育推進部准教授 岩﨑千晶)



講義を聞く参加者



ワークショップ

第4回 KU-COILワークショップ・国際シンポジウムを実施しました

2018年に採択された大学の世界展開力強化事業を受け、本学では新たにIIGE (グローバル教育イノベーション推進機構)が設置されました。この機構の最初のイベントとして、2018年12月7日~9日の3日間にわたり、国際シンポジウム及びFD研修を実施しました。当日は100名を超える国内外か

らの参加があり、COIL (オンライン国際共同学習)事業への関心の高まりを感じました。1日目のCOILを学ぶ基礎的な研修に始まり、2日目はIIGEのキックオフとしての事業紹介、ACE (米国教育協議会)、文部科学省、アメリカ領事館、UMAP (アジア太平洋大学交流機構)からの代表者挨拶、

そしてAIEA (Association of International Education Association) のディレクターDarla Deardoff氏、ニューヨーク州立大学アルバニー校のHarvey Charles氏の基調講演がありました。3日目には、IIGEが開発するCOILに特化したプラットフォーム (ImmerseU) に関するFDワークショップ及

日程:2018年12月7日(金)~9日(日)

場所: 千里山キャンパス 尚文館・新関西大学会館

大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学AP合同フォーラム 「今、あらためて学修成果とは何かを問う:第3期認証評価の先のFDを目指して」 を実施しました

日程:2019年2月9日(土)13:00~17:30 場所:梅田キャンパス8階

2月9日(土)梅田キャンパスにて大阪 府立大学・大阪市立大学・関西大学の 3校によるAP合同フォーラム「今、あらた めて学修成果とは何かを問う:第3期認 証評価の先のFDを目指して」が開催され ました。京都大学の松下佳代教授による 講演に加えて、大阪府立大学(高橋哲也・ 畑野快)、大阪市立大学(西垣順子・佐々 木洋子)、関西大学(岩﨑千晶·多田泰紘) から事例報告がされました。

松下氏からは、理論的に学修成果や評 価の多様性に関して紹介がされた後、ルー ブリックを活用した教育の質を保証するた めの事例について述べられました。印象 的だったことは、教員がルーブリックを 使って評価した直接評価と、学生が自分 で自己評価をした間接評価がイコールに はならないということです。しかし、そも そもルーブリックは教員による評価と学生 による評価が同じようになることを目指し た評価ツールであるべきです。さらに、大 学は自律的な学習者を輩出していく必要 があるため、学生自身が自分の能力を把握 していく力を培っていくことも重視してい かなくてはなりません。そのためのルーブ リックをどうつくっていくのか、どう活用し



て教育評価を実施することが望ましいの かに関して議論する必要があると痛感しま した。その後、事例報告、パネルディス カッション、参加者との質疑応答が実施さ れました。フロアとのやりとりでは学習成 果を出すための学習課題の大切さや、学 生の成長を実感できる評価方法の意義に 関して意見交換がなされました。

(教育推進部准教授 岩﨑千晶)



パネルディスカッション 京都大学高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代氏

第2回PALフォーラムを開催しました

2月23日(土)、大阪工業大学梅田キャ ンパス(OIT梅田タワー)を会場に、第2 回PALフォーラムを開催しました。今回 は「大学の壁を越えて学生が奏でる、時を 超えて伝わる新しい学びの調べ」をコンセ プトに、本学と摂南大学の学生アシスタン トが企画・運営を全て担当しました。参 加者の員数や属性が事前には不明である なか、どのような参加者であっても、そこ に共通するテーマを複数個掘り起こし、そ のうえで意見や知見を交換し、新しいアイ デアを創出できるようにと、きめの細かい 工夫が施されました。今回は午前から開 催したものの、議論等が白熱し、時間が足 りないと感じた参加者が多数いたようで

す。参加者からは「工夫に富んだワーク ショップであり、両大学は素晴らしい学生 を育成されていると感心した」などの感想 を頂戴しました。企画・運営に携わった 学生は、会話で発想の種が生まれ、グ ループワークで互いの考えに水を与えた が、それがいつか実を結んでほしいと願



ラーニングアシスタント 安井明日香

日程:2019年2月23日(土)10:00~17:00 場所:大阪工業大学梅田キャンパス OIT梅田タワー 2階

> い、大学の壁を越えて様々な意見が飛び 交い、それぞれの経験が混ざり合って新 しいアイデアが生まれるプロセスを目の当 たりにして、たった一つの言の葉でも、表 情一つでもチームにエンジンがかかるこ とを実感したようです。

> > (教育推進部教授 三浦真琴)



グループワーク風景

業担当者のためのワークショップが行われ ました。日本全国の大学から参加があった お陰で、IIGEの今後の活動への積極的な 継続参加もしていただいています。 JPN-COIL協議会も発足しました (2019年3 月現在18大学)。本事業をきっかけに、次世 代が求めるグローバル教育をIIGEで開発

し、普及していきたいと考えています。

びCOILで共通言語となる英語を介した授

(国際部教授/IIGE副機構長 池田佳子・教育開発支援センター研究員 ベラルガ・オリバー)



国際部教授IIGE副機構長 池田佳子



教育開発支援センター研究員 ベラルガ・オリバー

ランチョンセミナー「ルーブリックの作り方・使い方」を開催しました

日程:2018年11月29日(木)12:30~13:30/2018年12月13日(木)12:30~13:30

場所:千里山キャンパス 第2学舎1号館 B202(両日)

11月29日及び12月13日に、ルーブリックの 作り方と使い方についてのランチョンセミ ナーを開催しました。学習成果の多様な評 価が議論されるなかで、学習活動のパ フォーマンスを教育目標に沿って質的に評 価するツール「ルーブリック」が活用されてい ます。今回のランチョンセミナーでは、ルーブ

リックの導入を検討されている、すでに導入 されたルーブリックの改善を試みられてい る教職員の方と、導入・改善のポイントや事 例について議論し、文章課題を評価する ルーブリックの作成、改善を行いました。

(教育推進部特別任命助教 多田泰紘)



講師と参加者の意見交換

【ルーブリックの導入・改善をご検討の先生方へ】

ルーブリックの導入、改善についてご意見・ご質問などがございましたら、教育開発支 援センター多田(Email: tada@kansai-u.ac.jp)までお問い合わせください。また、ルー ブリックの使用方法や学生への説明に便利な「ルーブリックの使い方ガイド(教員用)(学 生用)」は以下のホームページからダウンロードしていただけます。

(http://www.kansai-u.ac.jp/ap/activity/publish.html#rubricguide)



参加者同士の議論

高大接続研修 滋賀県立玉川高等学校との ワークショップを実施しました

教育開発支援センターでは、12月10日 : を目的として開催しました。 (月)、千里山キャンパスにおいて、滋賀県立 玉川高等学校と高大接続研修を実施しまし た。平成26 (2014) 年度に文部科学省に採 択された事業「大学教育再生加速プログラ ム の一環として、昨年度に続き2回目の実施 となりました。本研修は、玉川高等学校の生 徒が、大学での学びを本学の学生とともに 体験することにより、主体的な学びの姿勢や 態度を育成する機会とすること、また、優れ たリーダーシップを持つラーニング・アシスタ ント(以下LA)(本学学生)を養成すること

当日は、玉川高等学校の生徒約40名と教 員が2グループに分かれて、体験授業に参加 した後、総合図書館ラーニング・コモンズに 移動して、当日の研修を各自が振り返りまし た。体験授業では、教育推進部の三浦真琴 と、教育推進部の岩崎千晶が担当し、LAが ファシリテーターとして参加しました。三浦が 担当したグループAでは、「クリティカルコミュ ニケーション」と「サーバント・リーダーシッ プ」をテーマとし、4桁の数字を使ったグルー ピングや、立体の正面図と側面図から完成形

を問う問題、図形を使った認知差体験等の ワークを実施しました。LAは教室内を回りな がら、生徒達の話に耳を傾け、グループワー

日程:2018年12月10日(月)14:30~17:30

場所:千里山キャンパス 第1学舎4号館 D212・D213

クが円滑に進むよう支援しました。

(教育推進部教授 三浦真琴・ 教育推進部准教授 岩﨑千晶)



玉川高校 高大接続研修の様子

【ラーニング·アシスタント(LA)の感想】

イベントを終えて私が感じたことは、アクティブ・ラーニングの場にお いて学ぶ者に差はないのではないかということです。学ぶ姿勢や参加す る姿勢があれば誰しもが学習者になると感じました。高校生側だけでな く、我々大学生側にも学ぶ機会があり、有意義なものとなりました。

(岩崎クラスLA 法学部4年 山田幸輝)

今回のワークショップの企画・実施では、参加する高校生に何を学んで ほしいかを入念に考え、目標設定をし、同僚のLAと何度も議論を重ねまし た。明確な到達目標設定をし、その達成のための手段を様々な方法による 検討を通じて、課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する計画 力の必要性を学びました。 (岩崎クラスLA 法学部4年 林 享佑)

 \mathbf{r} CTL事務局

昨年4月に大学ス ポーツを支援する部署 からCTLに異動してき た職員がいる。彼は

現場主義、毎週末どこかの試合会場に行く。秋 のトップシーズンにもなると一日に3種目掛け持ち で本気の学生を見守り応援。恐らく、昨年中に 一番「学歌」をうたった職員は彼だろう。

そんな彼がCTLの職員として約1年過ごし

た。第3期認証評価や実地調査、授業評価アン ケート改善に向けた対応、明治大学との合同IR シンポジウムなど通常のCTL業務に加えてイレ ギュラーなことが多かった。そういえば、彼の行く 所イレギュラーばかりだったか。

彼のスタンス。目の前の学生に対してレギュ ラーとかイレギュラーとか関係ない。学生が自ら 学び成長できる環境、学生が最高のパフォーマ ンスを出せる環境をいかに創るか、それを職員と して追求することは、部署や立場など関係ない。 3月に卒業する学生が彼のもとを訪れている。 会話している姿をみると、彼自身が学生に支えら

れ共に成長してきたように見える。学生の成長 の場面に立ち合い学びとる姿に、もう少し学生た ちの力をお借りして、パワーアップする彼を見てみ たい。恐らくそれは未来の学生、大学のために なるだろう。そう信じてやまない。

(friend)



関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514 http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2019年3月22日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター